

書評

岡崎栄松 『資本論研究序説』

平瀬 巳之吉

本書は表題から受けとられるように『資本論』そのものにとりくんだ労作ではない。前後二編にわかち、前編ではスミスおよびリカードの批判を中心として学史をあつかい、後編ではわが国の二人のマルクス経済学者——宇野弘藏氏と白杉庄一郎氏——を批判する形で理論分析を行なっている。いわば、『資本論』への流入と『資本論』からの流出という意味あいでは、本書は『資本論研究序説』と題されたものである。

一 前編

一 前編「古典経済学——価値論および分配論におけるアダム・スミスとリカード——」は、全巻中ほぼ半分を占めて、後編「マルクス経済学」をよびおこすためのプレルゥディエ

ンとなるものだが、私にはこの論稿について遠い思い出がある。この論稿の前史は、現著者が東大社研の助手採用論文として提出したものであったはずである。当時、これは審査員の間でたいへんな評判になった労作と聞か、その後、私自身、現著者から原稿のままこれを読ませてもらう機会に恵まれ、風評のいつわりでなかったことを実感した記憶がある。いまからすでに一五年も昔のことであった。その後、右の労作は一九五七年、いったん立命館大学学会誌に想を新たに加筆訂正して掲載された上で、いままた著書の巻頭を飾ることとなった。かえりみて感慨なきをえない。

こういう思い出のことから書き始める気になったのは、一つは書物や論文のもつ運命というものについて、改めて考えさせられるところがあったからにはほかならない。本論稿が

学史研究であるからには、いまから一と昔前の学史ブームの時代——本稿の原型が書かれたころから立命館学会誌に発表のころ——と現在とでは、この労作の世間での受けとられかたもずいぶんと違うのではなからうかと思われる。いまは学史研究がひところにくらべてかなり下火になっている。そういう意味では本稿は——したがって本書の前半身は——もつ

と早い時期に出版されていたほうが世間の注目を浴びたはずで、その点、損をしていることは確かであろう。それに学史研究家のけつして少なからぬわが国ながら、いまは思想史研究に傾斜しているから、本論稿のような固有の学史研究はその点でも損をしていると言わなければなるまい。それだけに、固有の学史研究を尊重する私としては、本論稿の意義と価値とを人一倍、評価したいと思うのである。

二 第一章は「問題提起」にあてられる。

まず、 \wedge 古典経済学 \vee の概念が構成される。 \wedge 古典経済学 \vee とは「ブルジョア的生産様式の科学的分析」「近代ブルジョア社会の内部構造の究明」を志向するものであって、「外見上の連絡の範囲をうるつきまわる」俗流経済学と区別される。包摂する人物の幅で言えば、「イギリスではウィリアム

・ペティに始まってリカードゥに終わり、フランスではボアギュベールに始まってシスモンディに終わる」ものであり、内容的には、価値論および剰余価値論の展開確立、利潤からの派生的所得としての利子の位置づけ、利潤および地代の未分化統一体としての剰余価値掌握、価値および剰余価値の生産過程的理解、等々として表象される。

言うまでもなく、これはマルクスの有名な \wedge 古典経済学 \vee 規定であることは、あまねくひとの知るところであろう。現著者がそれを採用し、そこから出発することに私としては全く異論はない。といって、 \wedge 正統学派 \vee のなかに、ジャン・バチスト・セー、ジェームズ・ミル、マルサス、シーニョア、ケアンズ、などを包摂する高橋誠一郎氏のやり方を「無概念的」と評して非難している現著者の態度には、私としてはにわかには賛同しかねる。高橋氏はただ通説にしたがって \wedge 古典学派 \vee の概念を採用しただけなのである。通説で言う \wedge 古典学派 \vee とマルクスの言う \wedge 古典経済学 \vee ——正確には古典的政治経済学——とは概念概成のしかたが違う。したがって概念内容が違うのは、形式論理学の約束にしたがって当然でなければならない。両者を混同すべきでなからう。もし立

場を逆にして、高橋氏が現著者の \wedge 古典経済学 \vee 規定を冷笑したとしたら、私は同じように氏をたしなめ、氏の幼稚さを笑ったことであろう。概念構成は問題によって違いうる。それをどうでも一つしかありえないと考えて、自己のものをおしつけるのは幼稚というほかあるまい。（げんに、ある年の経済学史学会で、ある報告者がシスモンディを \wedge 古典的政治経済学 \vee にいたるところ、シスモンディは古典派の批判者だというわけで、まっこのからそれに反対した老学者がいた。）

三 にもかかわらず、古典経済学者たちはブルジョアの視野に局限され、資本制生産様式を永久的な自然形態と見たために重大な誤りに陥ったとし、その一つを現著者は、スミスにおける価値論上の投下労働説と支配労働説、剰余価値論上の分解価値論と構成価値論、という形での \wedge 二重性 \vee において認識する。それが第二章「価値論および分配論におけるA・スミスの二重性」である。

ただし、現著者のいわゆるスミスの \wedge 二重性 \vee の内容そのものはこれまで論じつくされた感が深い。それだけに、ここで現著者がスミスの \wedge 二重性 \vee の論拠として確認していると思われる二大論拠を指摘しておくことは重要であろう。すな

わち、現著者は、価値の実体を確認しえなかった点にスミスの \wedge 二重性 \vee の一つの論拠を突きとめるのである。その点で、スミスが価値の実体認識に成功したとする藤塚知義氏の見解を厳にしりぞける。この点は、スミスの \wedge 二重性 \vee 認識こそ、かれをリカードゥにたちまさらせるゆえんだとする藤塚氏の主張を拒否しつつ、スミスのリカードゥにたいする優位はスミスのすぐれた歴史意識にあるとした点とともに、現著者の卓見を示していよう。

\wedge 二重性 \vee のもう一つの論拠は、現著者において資本制生産の絶対視に認められているように思われる。すなわち、支配労働説のよってきたるゆえんが、労働そのものを賃労働と見ること——ということは逆に言えば、賃労働を歴史 \parallel 社会的規定性において見ないことになるわけである——にあると認定されているように受けとれる。ここから、生産手段 \parallel 資本、土地 \parallel ブルジョアの土地所有、という想定が連関効果をもつて生じ、かくして労働 \parallel 賃労働という規定とならんで三位一体公式による支配労働説 \parallel 構成価値論が生じる、と現著者は断定しているようである。

四 第三章「価値論および分配論におけるリカードゥの一貫

性」は、スマス路線を踏み越えたりリカードゥが投下労働価値説と分解価値論とを展開確立させる論理過程を論じる。

リカードゥが「一貫性」に到達しえた最大の根拠は、マルサスとの穀物論争にあると現著者は評価する。してみると、リカードゥをしてスマスを超克させたものはやはり時代であり、歴史的条件が大きく作用したということになる。

ただ、リカードゥの「一貫性」とはいつても、リカードゥが商品価値の実体を見ようとしなかった点はスマスに劣る、と現著者は言う。かれが相対価値論に終始して絶対価値の認識に成功しえなかつたのは、そこに由来すると解される。それというのも、価値形態論の無視にある、と現著者は考える。

スマスの $r + m$ のドグマを踏襲する点でもリカードゥはスマスを越ええない。それは結局、両者とも労働の二重性の認識において欠けるところがあったからであり、それだから、価値生産物と生産物価値とを簡単に同視してしまつたのだ、と現著者は判定するのである。

五 以上のような次第で、原論文が書かれ、それが立命館大文学会誌に補筆発表されてから、かなりの年月が経過しているの、いまでは世間の通説となりきつた部分も少なくなない。

岡崎栄松『資本論研究序説』（平瀬）

しかし、本論稿を貫き流れ、本論稿に生命力を与えているものは、現著者が堅持するきわめてオーソドックな姿勢であり、学史を発展的につかもうとする歴史眼であり、理論の系譜をたどる確かな透察力である。それだけに、私としては現著者のスマスおよびリカードゥ解釈については一々賛成であつて異論をさしはさむべき余地を見い出さない。そして、現著者のこの資質あればこそ、前編の学史研究は切断されることなくかつ並列的にでなく後編の理論研究へと一路接続することとなるのである。

二 後編

一 第一章「ブルジョア経済学の批判者マルクス」は、もと初学者向けに書かれた解説書の一編なので、ここでは論評を割愛しよう。ただ、ここでも、現著者が私の「古典経済学」規定——私はそれを「平均原理の体系」と措定し、古典学派も俗流経済学の一部もマルクス経済学も平均分析の体系であるかぎり、すべて強引にそのなかにおしこんだ——を論難していることをしるし、前に高橋氏の「正統学派」規定について述べたと同じ言葉をもって現著者への反論的贈り物とした

い。
二 第二章「価値論の方法にかんする一考察」と第三章「商品論の展開方法について」とは、ともに宇野理論の批判にあてられている。

第二章では、『資本論』の編別構成にかんする宇野氏特有の解釈——第一巻第一・二篇∥流通論、第一巻第三篇以下および第二巻∥生産論、第三巻∥分配論——が批判される。とくにそのうち、∧第一巻第一・二篇∥流通論∨説の序論的部分がとりあげられる。

宇野氏は∧抽象∨を「それ自体のうちに上向の必然的契機をもつものではなくてはならない」という点に求める。そこから、『資本論』冒頭の商品が歴史上の単純商品でなく資本制商品でなくてはならない、という結論が導出される。この点は全く正しく、マルクスとも一致する、と現著者は判定する。

と、いって、ここから、宇野氏が、それゆえに、商品や貨幣さては資本すらも、前資本主義社会ですでに存在するのだから、商品形態そのものはどのような生産関係のもとで生産された物であれ、あらゆる物に与えられるわけで、流通形態と

しての商品・貨幣・資本は生産論にききだつ流通論で論じられなければならない、とするのは誤りだと現著者は断定せざるをえない。なぜなら、さような見解だと、ブルジョアの富の原基形態としての商品ではなく、歴史上の単純商品と資本制商品とを一様に形態的に包摂する商品、流通形態としての商品とを∧原理論∨の出発点にすえることにならざるをえないからである。しかし、そのような∧商品∨はそもそも『資本論』冒頭の商品ではありえない。——と、現著者は宇野批判の焦点をここにしばって論峰するどくつめよる。

つまり、現著者は、宇野氏の自己矛盾——出発点の商品規定と到達点の商品規定との背離——を突いているわけである。冒頭商品からの特殊歴史的形態規定の欠落——それこそが『資本論』第一巻第一・二篇を流通論と判定した宇野理論の落とし穴であった。そのためには、宇野氏は∧商品流通社会一般∨というふうな空疎なものを想定せざるをえなくなろう。宇野理論における理論的一貫性の喪失、みずから設定した二律背反、——それこそが∧流通論∨における宇野理論の特徴でなければならない、とそのように現著者は宣告する。

第三章では、商品の分析を使用価値から始めたマルクスの

ようにではなく、価値から始めるべきだとする宇野氏の方法論が批判される。

宇野氏が商品分析を価値から始めなければならぬのは、氏の前述のような商品認識と一致するところである。すなわち、商品が財貨ないし生産物一般に解消されてはならないとするそれ自身は全く正しい認識と。

と云って、商品はなんらか使用価値であるかぎりでのみ初めて価値たりうるのだから、使用価値から商品分析を始めたマルクスはやはり正当である、と現著者は考えざるをえない。それゆえ、マルクス方法論にたいする宇野氏の疑惑は、冒頭商品が特殊歴史的な形態規定性を与えられたものだということと看過ないし黙殺する方法的態度と一致しているわけだ、と現著者は推理する。そして、それはまた現著者の見るところでは、価値実体論を軽視して価値形態論に傾斜する宇野氏の形態論的立場とも照応するものである。

かくして、宇野式 \wedge 抽象 \vee は「完全に観念的な抽象」に値しおわらざるをえない、と同時に、価値および剰余価値の生産こそが資本制生産の目的だとする宇野氏の端緒的主張は、氏自身によって後論でくつがえされている、つまり、宇野理

論における内在的矛盾、というのが現著者の意見であった。

三 第四章「使用価値の捨象にかんする一考察」および第五章「白杉教授の効用測定論について」は、いまはすでに故人の白杉庄一郎氏にたいする批判に向けられている。

第四章では、白杉氏の著書『価値の理論』における一主題である \wedge 使用価値の捨象 \vee の問題がとりあげられる。

白杉氏は『資本論』冒頭の商品を歴史上の単純商品でなく資本制商品だと想定する。で、その商品価値の基礎にある \wedge 第三の共通物 \vee を考えるためには、使用価値は捨象されなければならぬことは確かだが、しかし、捨象されるべきなのは個別的具体的使用価値であって、 \wedge 使用価値一般 \vee （一般的抽象的使用価値、有用性一般）ではない、というのが白杉氏の主張となる。

しかし、白杉氏の \wedge 使用価値の捨象 \vee は、「使用価値にたいする所有者自身の欲望の捨象」を意味するのみで、マルクスのものではありえなく、その根底には商品の社会的使用価値を社会的使用価値一般にすりかえるトリックがひそんでいて、と現著者は指摘する。

現著者によれば白杉理論の欠陥はつぎの点にある。——使

用価値の客観的物的性格が単に所有者自身のための使用価値、具体的使用価値だけにかぎられ、そのため商品そのものが使用価値であることが忘れられていること。

ただし、白杉氏の「使用価値一般」はポエム流のそれとは違い、一見するところマルクス流の抽象的人間的労働に基礎づけられているが、結局において、その真意は労働価値説と限界効用価値説との折衷——白杉用語では「総合」——にある、というのが現著者の判断である。

だいたい、「使用価値一般」には白杉氏自身が認めているように、客観的量化の原理がないわけだから、これを価値と結びつけることは自己矛盾である、ということに現著者の立場からはならざるをえない。

第五章は前題を受けて白杉氏の効用測定論をめぐって展開する。

効用が可測的でありうるためには、欲望充足手段によって媒介される必要があるが、それは貨幣や価格でなくて労働である、と白杉氏は主張する。しかし、その労働は投下労働でなくて、「欲望充足に支出しよう」と決意された「労働」である点に難点があると現著者は考える。すると、それは、商品の

購買に支出された労働であって、してみれば、白杉説は支配労働説に墮してしまいうほかならう、と現著者は結論するのである。

四 以上、宇野・白杉両説をめぐる現著者の批判的検討を紹介した。私は角力の行司役をつとめるつもりはないから、主題の論点についていずれとも判定をつけることはさしひかえたい。ただ、もはや応答を聞く由もない白杉氏本人からはそれを得たかったという愛惜の念を禁じがたい。が、ここでは宇野批判にかんしてつぎの一点だけを指摘しておきたい。

私は現著者の批判点はきわめて適切で鋭いものがあると思いが、しかし、この種の批判に宇野理論は屈服しないだろう。宇野理論は不死身である。という意味は、それが「環節動物理論」だということにはかならない。環節動物と言えば、ひとはすぐミミズを想起するであらう。ミミズは切られても死なないように、宇野理論もまた少々のことでは不死身である。多くの巧妙きわまる逃げ道をもっているからであり、多くの弁護者をかかえているからである。

現著者は序文で、「今後とも宇野理論とくに「原理論」の吟味・検討をつづけてゆきたいと考えている」と述べているが、

そう言うところを見ると、現著者にとって宇野理論はよほど魅力的とみえる。私にはその気もちがよくわからない。おそらく、私には宇野理論の「ダイゴ味」がわからないのだろうが、そのことはどうでもよい。むしろ私が現著者に求めるにふさわしいと思うことは、みずからの積極説の構築と展開とに向かつて前進することである。氏においてそれが必要であると同時に、また可能でもあることを、まさに本書一編が指し示しているように思われる。

なお最後に現著者に向かつてつぎの注文をつきたい。本書は価値論と剰余価値論との領域に終始し、いわゆるミクロ分析にとどまるものだが、今後はいつそう視野を広げてマクロの分野に踏みいり、蓄積論から変動論へ、さらには独占理論へと分析の歩を進めてほしい。それが現著者をさらに前進させるゆえんであらうし、また現著者の才能をもってすれば十分可能であらう。(日本評論社刊)